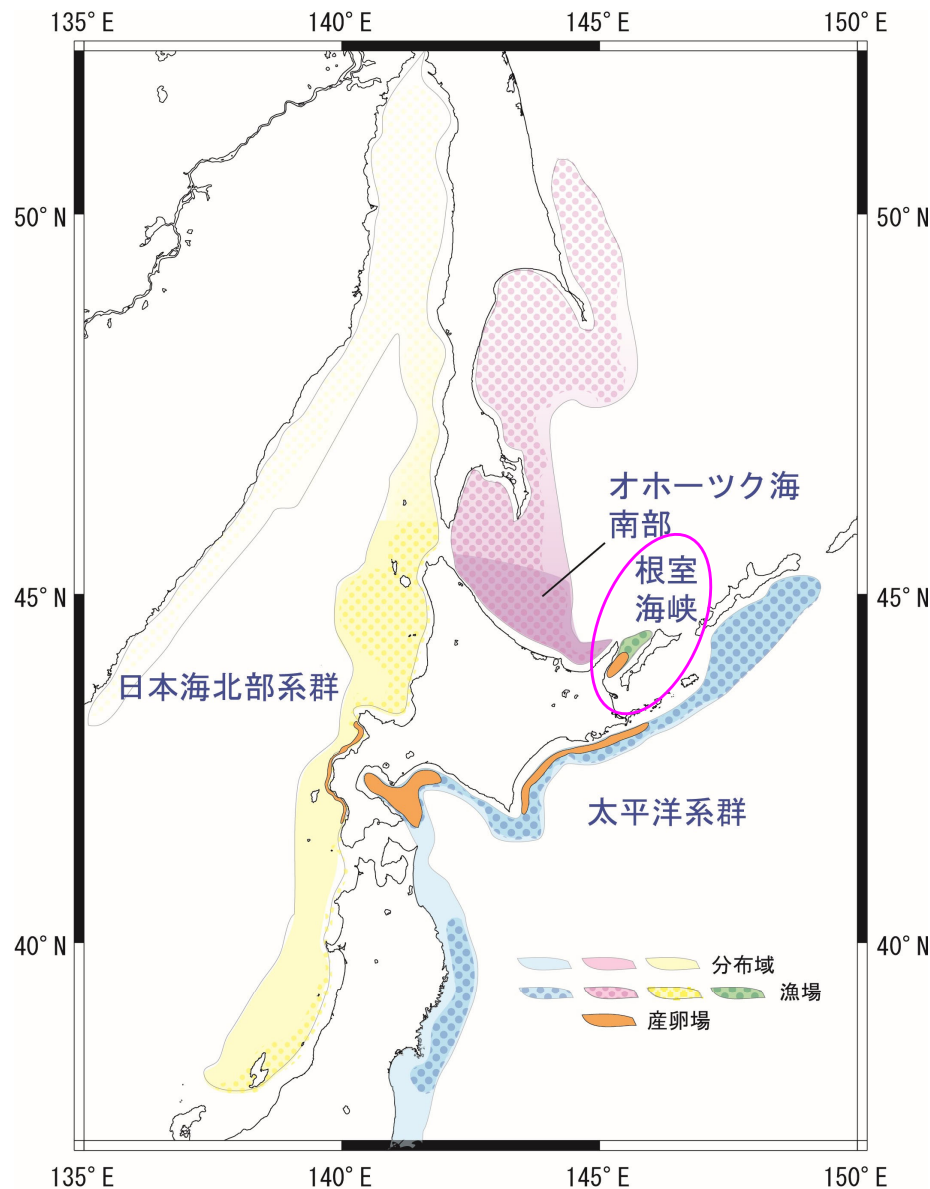




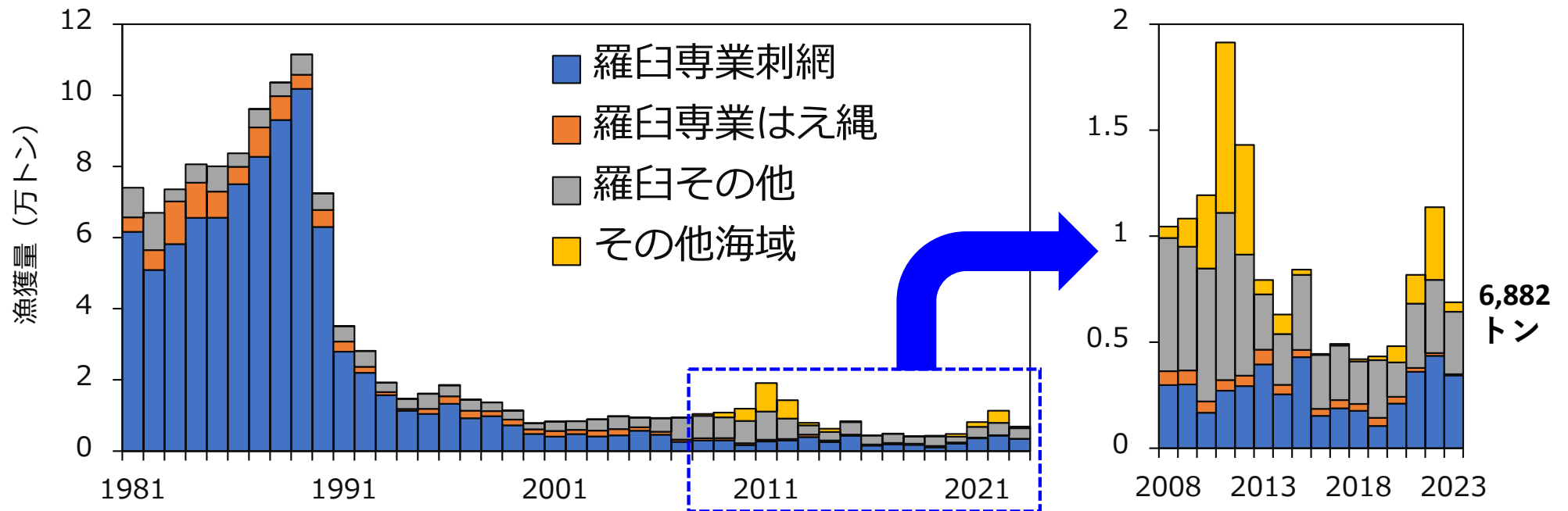
スケトウダラ根室海峡 令和6年度資源評価結果

生物学的特性等



- 寿命： 不明（10歳以上）
- 成熟開始年齢：
3歳（一部）、5歳（大部分）
- 産卵期： 1～4月
- 産卵場： 根室海峡以外の水域の
産卵場については詳細不明
- 産卵のために根室海峡に冬季に
来遊する群れが漁獲の主体
- 産卵期以外は主にオホーツク海
南西部に分布すると推測される
跨がり資源
- 若齢期や分布・回遊に関する情
報は少ない

漁獲量の推移



- 漁獲量は1990年代初頭に急減し、その後は低水準で推移
- 2011年漁期にかけて緩やかに増加したが、2012年漁期以降は再び減少
- 2021年漁期以降再び増加したが、2023年漁期は減少して6,882トン
- 1990年代まで漁獲の大部分は「羅臼専業刺網」と「羅臼専業はえ縄」
- 2000年代以降「羅臼その他」や、年によって「その他海域」が増加

資源評価の方法

2023年漁期（4月～翌年3月）までの漁獲データ
すけとうだら刺網（専業船）の努力量と漁獲量



すけとうだら刺網の1隻1日あたりの漁獲量（CPUE：
資源量指標値） ※ 2002年漁期以降のブロック操業除く



資源管理基本方針で定められた「**維持または回復させるべき目標（0.71トン/隻日）**」を基準に現状評価*

* 本資源は跨がり資源であり、新漁業法に則したMSYに基づく管理基準値の設定は困難であるため



スケトウダラ（根室海峡）①

スケトウダラは北太平洋に広く生息し、本評価群はこのうち根室海峡で漁獲される群である。本資源の漁獲量等は漁期年（4月～翌年3月）の数値を示す。

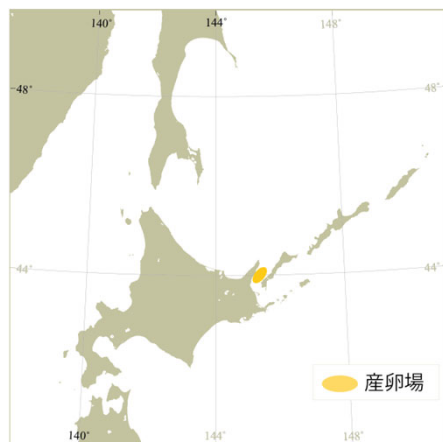


図1 分布域

本資源は北方四島水域やロシア水域などに跨って分布する。日本漁船の操業水域には主に産卵期に来遊すると考えられる「跨り資源」である。

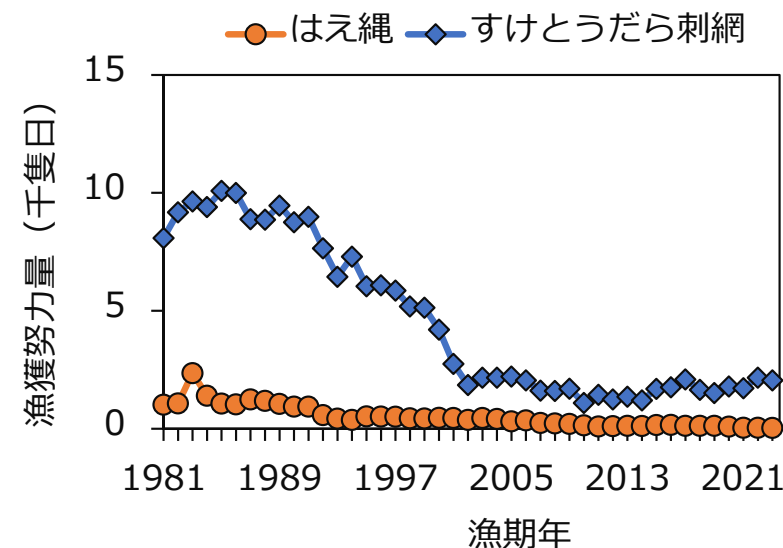


図3 漁獲努力量の推移

漁獲努力量は、すけとうだら専門の固定式刺網漁業では2002年漁期まで大きく減少してその後はほぼ横ばい、はえ縄漁業も1983年漁期を最高にその後減少した。隣接水域におけるロシア漁船の漁獲量・漁獲努力量は不明である。

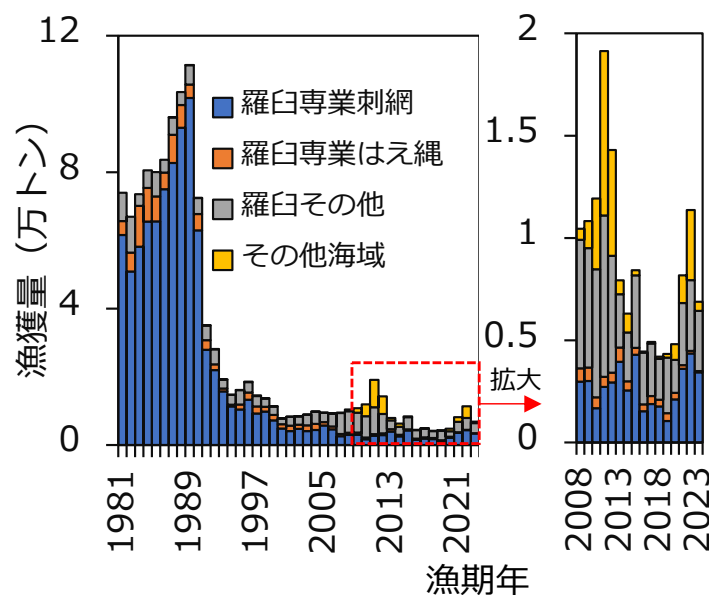
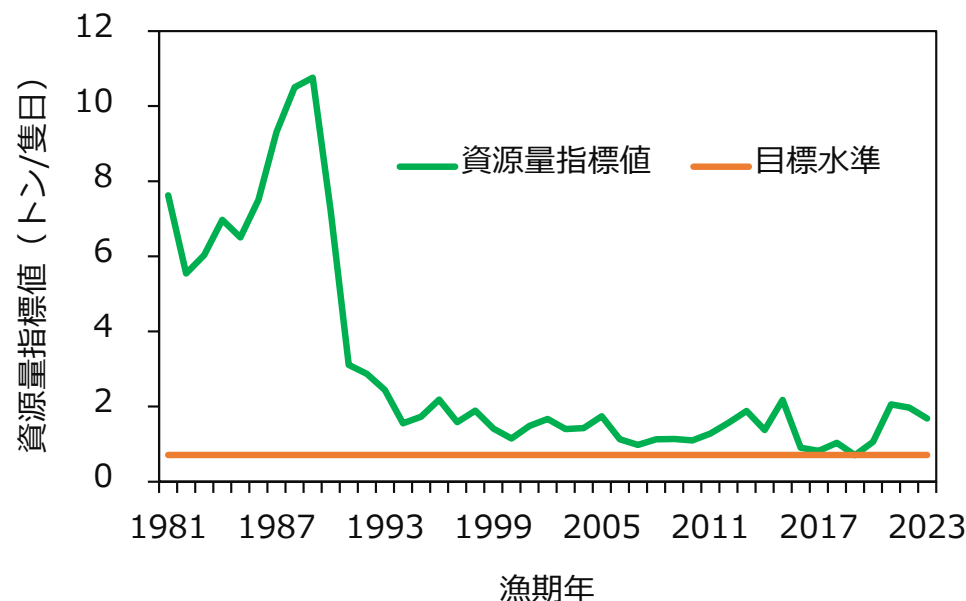


図2 漁獲量の推移

漁獲量は1989年漁期の11.1万トンを最高に急減して2000年漁期には1万トンを下回った。2010年漁期前後に増加したが、その後は減少した。2021年漁期から再び増加したが、2023年漁期は0.7万トンに減少した。

スケトウダラ（根室海峡）②



本資源の漁獲シナリオについて

本資源は隣接する水域に跨って分布し、日本漁船の操業水域における情報のみでは資源全体の動向を捉えることができないことから、最大持続生産量に係る目標管理基準値や限界管理基準値を定めることは困難である。

本資源の漁獲シナリオでは、我が国の漁船による漁獲の状況等を踏まえて、我が国漁船の操業水域に分布する資源の最適利用が図られるよう漁獲を管理するとされている。

図4 資源量指標値と目標とされる水準

羅臼地区のすけとうだら専業の固定式刺網漁業による延べ出漁隻数当たり漁獲量を資源量指標値とした。2002年漁期以降はブロック操業*のデータを除いた。

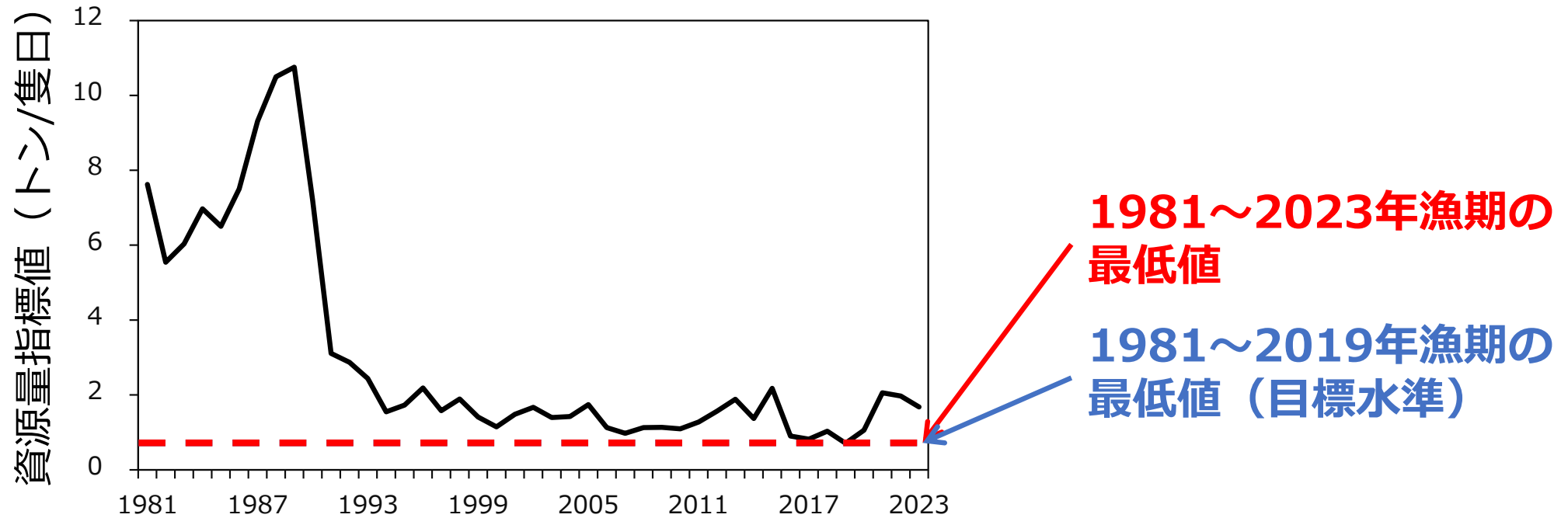
本資源の漁獲シナリオでは、資源量指標値の1981～2019年漁期の最低値（0.71トン/隻日）を、維持または回復させるべき目標と定めている。2023年漁期の資源量指標値（1.68トン/隻日）はこの目標水準を上回った。

*ブロック操業とは漁獲圧軽減による資源保護と操業コスト削減を目的として、複数の経営体がグループを作り、グループ内の1隻が交互に休業する操業形式。

前回のSH会合前後からの資源評価手法の変遷

年度	手法
2020年度 (前回SH会合)	すけとうだら刺網CPUEで、資源の推移・動向を判断。
2021年度	すけとうだら刺網CPUEで、維持または回復させるべき目標に対する水準と動向を判断。 補足資料にCPUE標準化に向けた取り組みを記載。
2022年度	補足資料に資源量指標値に関する課題の整理を記載。
2023年度	変更なし
2024年度	補足資料の資源量指標値に関する課題の整理を削除 (直近の議論) 標準化CPUE導入に向けた課題の克服 (刺網について 情報収集中)

前回のSH会合時点の目標水準のその後



- 資源量指標値の最低値でみると、前回のSH会合以降変化なし
- 今年度の資源評価において最新年のデータが加わり、更新される